

協働の精神「結」の復活で目指す いつまでも住み続けたいまちづくり

めかた まこと
目片 信
大津市長

独自の環境・歴史・文化が育てた 「結」への思い

総合計画に「愛称」を付ける例が最近増えている。そうした愛称には、それぞれの市が精魂込めて策定した総合計画に託す「都市としての在り方」「目指す方向性」などが生き生きと感じられる例が少なくない。大津市のケースはその好例といえる。

大津市総合計画の愛称は「結(ゆい)プラン」。結とは小集落など小規模の自治単位内において、近代以前には当たり前のように行われていた「共同作業」制度の一つだ。例えば世界遺産にも登録された富山県・五箇山や岐阜県・白川郷における合掌造りの茅葺屋根の葺き替え作業などが、その典型として知られる。

一人(一家)では不可能な作業を集落全体の共同作業で実現しようとする相互扶助精神が、自然発生的に制度化されていった結の仕組みは、昭和前半期ぐらいまでは全国各地に残っ

ていた(呼称はさまざまだが)。

この結の仕組みを大津市の「結プラン」は市民協働の仕組みになぞらえらるるとともに、総合計画の遂行にはすべての立場の人々による「手と心をつなぎ合う市民協働の精神」が不可欠であることを、端的に表現(発信)しているといえるだろう。

「総合計画における大津市の将来都市像は『人をつなぎ、時をつなぎ、自然と結ばれる 結の湖都 大津』と定めています。この都市像にはまさにわが国の良き伝統であった『結』を協働のまちづくりの先駆けにとらえ、大切にすべきさまざまなものを結ぶことで、それらの力や価値を高め、輪を広げ、地域が新たなものを生み出していく力にしたいという願いが込められています」

そう語るの目片信大津市長である。実際、大津市には、この「結」の伝統が色濃いうち、琵琶湖湖南西岸沿いに延び、南北約46



多かった。今でもこの小集落の中には、かつての共同作業の制度の名残が失われていないところが少なくないのだ。

つまり「結プラン」の愛称は単に名称上の表面的意味合いだけで付けられたのではない。「結」制度の現代的復活ともいえるべき、市民・事業者・行政の三者による協働のまちづくりの取り組みへの強い願いが「結プラン」の愛称には込められているのだ。

目片市長は次のように言葉を重ねる。

「行政だけでなく、市民だけでなく、事業者だけでもない。本市のまちづくりの主体である三者が力を結び、互いに尊重し合いながらそれぞれの役割をしっかりと果たし、協力し合える三者協働の精神が、特にこれらの時代はより重要であるというところ。さらに1千年をはるかに超える歴史・文化の蓄積を持ち、琵琶湖を象徴とする独自の自然環境を持つ特徴などを踏まえ、本市にまつわるヒト・モノのすべてを一つの輪に結んで新たな力の糧とすることが、21世紀の大津市の発展には不可欠だと考えております」

具体的に大津市における協働の取り組みで市民側の活動事例を代表するのは、平成16年度から実施され、今年で7年目を迎えた「まちづくりパワーアップ事業」だ。市民活動団体・NPO団体を対象にまちづくりに関する事業を公募し、内容が適当と思われる事業に対し、市から助成金を交付する制度である。平成21年度までに174の活動を支援し、今年度も23の活動の支援が決定している。単に助成金を交付するだけではない。事業の性格によっては市が市民団体と共催したり、イベント等の実行委員会・協議会などに参加したり、あるいは後援・事業協力するなど、当該事業に最もふさわしいと思われる形態で取り組みを



琵琶湖の水質保全に不可欠なヨシは琵琶湖独特の風景をも形成(ヨシ刈りの模様)

行うきめの細かさも目を引く。

市民側の活動に関しては、平成18年度に開設した市民活動センター(指定管理者・NPO法人おおつ市民協働ネット)が大きな推進力となっている。市民活動センターは文字通り市民活動の拠点であるとともに、初めて参加する人々には入門窓口の役割も果たしている。行政側も平成19年度に市民協働推進室(協働推進の総合窓口)を設置したほか、協働のまちづくり庁内推進本部(部局横断的な組織で、協働事業に関する調査・検討を実施)を設置。市民や事業者とのより緊密で効果的な協働の推進体制を絶えず模索・整備する努力を重ねている。

また平成21年度には市民参画による「協働のルール策定委員会」を設置し、23年度施行を目標に新たな「協働のルールづくり」に取り組むなど、着々と取り組みの精度が上がりつつある。



毎年35万人前後の観客が詰め掛ける、8月の風物詩「びわ湖大花火大会」



延暦寺と日吉大社の門前町・坂本に残る穴太衆積み堅固な石積み(重要伝統的建造物群保存地区)

派の皆さんです(笑)。ですからこれからは、世界文化遺産があり、古都(注)平成15年に全国10番目の古都指定)でもあるという大津市の固有性、琵琶湖を代表とする自然を一般の旅行者にも理解していただけるような、明快なテーマ性を持った観光振興のプログラムも必要だと考えております(目片市長)

そのような観点から大津市では平成21年3月に「びわ湖大津 結の観光交流が喜びを生むまち」をテーマとする「大津市観光交流基本計画」(実施期間は平成28年度まで)を策定。22年3月には、市民・事業者・団体・行政の4者の連携と協働による「大津市観光交流基本計画アクションプラン」を策定した(テーマは「大津 おもてなしとびわ湖と水の物語」)。今後は琵琶湖の湖上交通が日本の命運を握った戦国時代の大津を体感できるようなルートの



総合計画「結プラン」の策定に参画した市民委員会の視察

「このように段階を踏んで各種の制度づくり、環境や仕組みづくりを進めてはおりませんが、やはり基本になるのは大津市民に今も残る助け合い精神、すなわち「結」の考え方。この原点を忘れず、市民・事業者・行政が共に「住み続けたいまち大津」を目指したまちづくりを進めていく必要があると考えます(目片市長)

大津市独自の「固有性」を積極的に発信したい

地形や環境の変化に富んだ大津市の市域には、北部から南部に至るまでほぼ満遍なく歴史遺産・文化的遺産が散りばめられている。例えば最北部から最南部に至る湖岸地域には中世以前からの湖上交通や漁業でにぎわった集落が今も点在する。さらに北部山すそには世界文化遺産に登録された比叡山延暦寺(788年創建の天台宗総本山)がある。比叡山のふもとには延暦寺の僧坊が並び、全国

2000の日吉・日枝・山王神社の総本宮日吉大社(創建は7世紀以前)のある門前町にして、明智光秀ゆかりの城下町でもある坂本が開ける。

坂本から南下すると近江大津宮(天智天皇が667年に飛鳥岡本の宮から遷都)跡がある。市中心部近くには三井寺(正式には園城寺。天台寺門宗総本山。7世紀に創建後、9世紀に再興)が、さらに市域南部には石山寺(747年創建、東寺真言宗)があるといった具合だ。これらの歴史・文化遺産は1千年以上の歴史を持つが、さらに中世(平安時代から鎌倉・室町期)、近世(江戸時代)から近代に至る文化遺産・歴史遺産を一つ一つ挙げていくとキリがない。掛け値なしの「歴史・文化の宝庫」といえるだろう。

だが目片市長は、「歴史・文化遺産の素材が多過ぎて、これまでは観光振興などの面から、それを消化しきれなかったというのが正直なところだ」と苦笑する。その背景として、京都から10分(車で電車でも)で来られる地理的環境とともに、大津の歴史には奈良・京都の歴史と常に深く絡み合ってきた事情がある。前述したように飛鳥から近江大津宮への遷都が667年なら、平城京への遷都は710年、その数十年後に平安京(794年)に遷都されている例を見れば一目瞭然。このような事情は大阪との関係にも当てはまる。そのような意味合いからも、日本の王朝政治が生まれ育ち、幕末期に至るまで常に歴史

策定など「物語を感じる周遊ルートづくり」を積極的に展開していく予定だ。

大好評を得た湖岸のにぎわい拠点の創出

この大津市における観光振興の取り組みには、ほかにも重要な要素がある。それは、江戸時代の町家など歴史的な町並みが残る中心市街地の整備・活性化という視点である。

大津市中心部の町家には、旧東海道の町並みをほうふつさせる黒壁、格子づくりの外観、間口が狭く奥行きが広いつくりなど、江戸時代の雰囲気が残されている。京都を目前とする東海道五十三次の53番目、中山道六十九次の69番目の宿場として栄えた当時の雰囲気は今に伝える町家が多い。街道沿いには当時創建された寺院も散見されるほか、ちよつと街道を外れば、前述した中世はおろか1千年以上も前の歴史遺産・文化遺産を見つかることもできる。

大津市の町並みに見られるこの「古都」であると同時に「街道沿いの都市」でもあるという特質は、すべての主要街道の「到達点」である京都とは決定的に違う雰囲気を出している。現在も湖北に向かう道、京都・大阪に向かう道などがダイナミックに交差する大津市の中心市街地は、だから非常にアクティブな雰囲気がある。その道を現在、路面電車としては非常に大型に属する2両編成と4両編成の京阪電車が1日中行き交っているのも楽しい。

そこで大津市では、この中心市街地という

の表舞台であり続けた近畿圏の歴史・文化をざっと体感しに来る修学旅行者や一般旅行者に対し、京都・奈良・大阪と比較した上で大津市の独自性を分かりやすくアピールするのは、確かに難しい部分がある。しかし、逆に説明抜きで歴史的・文化的価値を理解できる中・上級者の旅行者には、奈良・京都・大阪ともまた違う大津の歩みはたまらない魅力を放つ。

「いわゆる歴史・文化の『通』といわれる人たちに高く評価していただけるのは非常に嬉しい反面、まちなにぎわいをもたらしたり、経済効果をもたらしたりしてくださるのは、どちらかというあまり歴史に詳しくない多数



かつて織田信長の焼き討ちにあった世界文化遺産「比叡山延暦寺」は今も大津の象徴(根本中堂)



京阪電車を使えば大津市から京都・大阪まではあっという間

観光資源に、さらに磨きをかけようと、JR大津駅前から京阪電車・浜大津駅周辺、さらにその先に広がる琵琶湖・大津港周辺にかけて面的な整備およびにぎわい再生・創出を目標に掲げて、取り組んでいる。

具体的には「①JR駅・港を結ぶ動線のリニューアルによる新たなにぎわいの創出」「②同エリアにある町家などの活用による複合的都市機能の充実」「③琵琶湖湖岸・港における集客・交流機能の強化」などの諸施策を実施することで、「琵琶湖や町家などの大津らしい資産を生かした特色あるまちづくりを目指す」という。

大津市における都市の再生・にぎわいの創出プロジェクトは現在、上記①③の諸施策のうち、琵琶湖湖岸を主要舞台にする③の施策が最も進ちょくしている。特に平成21年から22年にかけて完成した、次の3つの拠点施



からくり付きの13基もの曳山がまち中を巡行する「大津祭」は毎年10月に開催

その効果も大きいのではないかと考えております(目片市長)

大津市の子育て支援は実際、かなり充実している。例えば保育園の待機児童解消策としては民間保育所の整備支援による660人の定員増加を5年間で達成する見込みだ(今年度はそのうち300人定員増)。さらに、家庭的保育(保育ママ)事業は平成22年4月、滋賀県では初めて導入された。

また、幼稚園に子どもを通わせながらも、仕事などのために保育後の預かり保育を希望する親の願いに応えるため、公立幼稚園での預かり保育拡充に向けて取り組みを進めている。



湖岸にレストラン・カフェが並ぶ「なぎさのテラス」は初年度13万人が利用した

設の整備は、琵琶湖湖岸の雰囲気確実に新しい空気を送り込んだといえる。

・「なぎさのテラス」整備
平成21年4月、なぎさ公園内に完成。オープンカフェスタイルのおしゃれな飲食店舗4軒が並んでいる。

・「湖の駅」整備
平成22年3月、浜大津アーカス内にオープン。歴史的建造物である旧大津公会堂はかつて公民館・社会教育会館として活用されていたが、リニューアル後は株式会社まちづくり大津が1階・地下1階に飲食店4軒を誘致。2階・



旧東海道の香り豊かな町家を復活させる修景事業でよみがえった花屋さん

3階はホール、多目的室、会議室、情報発信室、談話室などとして活用されている。

町家などの活用を目指す②の施策についても、外観を旧東海道沿いの町家にふさわしいデザインで修景する試みが始まっており、今後の展開が非常に楽しみである。

「中でも『なぎさのテラス』は大好評で、年間7万人の集客を目標にしていたのに対し、1年目は13万人もの方々が利用してくださいました。『湖の駅』『旧大津公会堂』もオープンしたばかりですが、女性客を中心に非常ににぎわっています。また町家の修景事業を実施している地区はもとも昔ながらの温かいコミュニティが形成されていた地区です。江戸時代から続く秋の大津祭の象徴「曳山が似合うまちなみ」という趣旨に賛同してくださったお宅を対象に、修景の際には補助金を出させていたいております(目片市長)

JR大津駅に向かう地域のにぎわい創出を

そのほか、助産師や保健師などが生後1カ月以内の赤ちゃんのいる家庭を訪問する新生児訪問や保育士と地区の民生委員児童委員などが生後4カ月までの乳幼児のいる家庭を訪問する全戸訪問事業、各種の子ども医療費助成事業などを通じて、大津市では子どもの健やかな育ちを大切にしている環境づくり、安心して子どもを生み育てることのできる環境づくりなどの実現にまい進している。

また、今回の取材では市内6カ所の地域子育て支援拠点施設のうち最大規模の「大津市子育て総合支援センター ゆめっこ」を訪問した。同センターは子育て相談、友人との集い、息抜き、講座参加などさまざまな目的を持つ親子が1日平均300人利用しており、写真を見ても分かるように、その活況ぶりが非常に印象的だった。

「大津市は平地面積が狭いため、工場誘致・企業誘致をはじめ、いろいろな意味で開発がしにくい土地柄です。しかし、自然や文化などの面での環境の良さに加えて病院も多く立地するなど、暮らしやすさや子育てのしやすさについては各方面からお褒めの言葉をいただいております。市民の約75%がこれからも大津ないし滋賀県に住みたいと考えているという意識調査のデータもあります(目片市長)

これは逆に市民による地域行政への関心度の高さを物語るものでもあろう。また地域愛に裏付けられた協働精神を基本とする「結プラン」には、市民による地域への関心の高さが不

意識した整備と回遊性の獲得については、湖岸と旧東海道沿いのにぎわい拠点がようやく完成したばかりである。むしろそれらの拠点の今後の動向を調査・分析の上、じっくり取り組むべきかとも思われる。

次世代育成支援事業がもたらす地域への期待と関心

東京首都圏や一部の急成長・新興都市以外の都市では、全国的に人口減少が続いているのが実情である。特に歴史が古く、都市的集積が完成された都市ではその傾向が強い。

そんな中であって大津市は、歴史の古さや開発(平地)面積の少なさは裏腹に、微増ながらも毎年少しずつ人口を増やし続けている珍しい例にあたる。

「二つには京都・大阪から近いということによるベッドタウン的な理由もあるでしょう。しかし、このような理由で人口が増えている都市はおおむね若年層の方たちの移住が大きなウエイトを占めます。ところが大津市の場合には中高年世代の移住が比較的多い。これは交通面での利便性に加え、やはり多彩な自然環境、琵琶湖の景観、歴史・文化に恵まれた落ち着いたある雰囲気などが効果を発揮しているのではないかと考えられます。では、若年層の移住が少ないかということなることはありません。子育て支援をはじめとする福祉施策に大津市はかなりの自負・自信を持って、さまざまな施策を行っておりますので、



毎日大勢の親子が集う、子育て総合支援センター「ゆめっこ」

可欠だ。それだけに今後さらなる行財政改革の断行とともに「市民の期待の高さに見合った行政サービスの工夫を常に続けていかなければならない(目片市長)」の言うまでもない。現代の社会的環境においてそれを遂行するのは実際、非常に困難を伴う。だが1千年以上もの歴史的・文化的蓄積の上に立つ大津市のこと、付け焼き刃でない、自前の結の精神にのっとった、三者協働による「本物の協働精神」をもって乗り越えていくに違いない。



大津市の観光キャラクターを務めるゆるキャラ「おつるくん」

(取材・文 遠藤隆)